

私と私の家族とは主に仕える

ベレーシート(はじめに)

- 私がリハビリテーション病院で出会った一つの詩。

「春に」 谷川俊太郎

この気持ちはなんだろう
目に見えないエネルギーの流れが
大地からあしのうらを伝わって
ぼくの腹へ胸へそうしてのどへ
声にもならないさけびとなってこみあげてくる
この気持ちはなんだろう
枝の先のふくらんだ新芽が心をつつく
よろこびだ しかしかなしみでもある
いらだちだ しかもやすらぎがある

- 3月11日に脳出血を発症して私は、今、回復期リハビリテーションを専門とする病院に入院しています。そこでは、患者が目指している回復の目標に合わせてリハビリがなされ、私は三つの分野(理学療法、作業療法、言語聴覚療法)でリハビリを毎日受けています。先に掲げた谷川俊太郎氏の「春に」という詩は、手のリハビリを担当している作業療法士がパソコンに打ち込むための教材として選んでくださった詩です。この詩は実はもっと長いのですが、その一部だけでも、私が今回の「オール・キッズ・キャンプ」において感じていることをうまく表現しているように思い、驚かされました。

- 今から二年前の2016年5月に、連盟のクリスチャンホームの信仰継承を目的とした最初のキャンプが、4組の家族(沖縄から2組、関東から1組、そして北海道から1組)からスタートしました。そして昨年は関東から1家族が増え、今年の第三回目には8組の家族が参加されています。数としては最初のキャンプと比べると二倍の増加です。単に、数が増えたことに私は驚いているわけではありません。こうしたキャンプがもたれること自体に対し、私のうちに「この気持ちはなんだろう」という言葉には表わせない、神の不思議な導きと神のご計画とみこころを感じているのです。しかしそれとは別に、この詩の中で「よろこびだ しかしかなしみでもある いらだちだ しかもやすらぎがある」と表現されているアンビバレントな気持ちが私のうちにあることも事実です。なぜなら、クリスチャンホームの信仰継承の取り組みは、私たちが考えている以上に主にある**大事業**であり、しかも緊急的な課題であるからです。

- 今日、家族観が時代とともに変化しつつあります。そうした変化の中で、単に「この世と調子を合わせ

てはいけません」(ローマ 12:2)ということばが独り歩きしても立ちゆきません。そのあとにある「むしろ…」に私たちは注目しなければなりません。「むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります」(新改訳 2017)とあります。では「心を新たにする」とは具体的にどういう意味なのでしょう。それは、一言で言うなら、私たちが自分のやりたいことや願いを神に求めるのではなく、神にはなされたいことがあるということを知る、つまり「神のご計画の全体像を知る」ということなのです。使徒パウロはエペソの教会の長老たちへの訣別説教の中で、自分はこれまで「神の恵みの福音」を証しすると同時に、「神のご計画のすべてを、余すところなく・・知らせた」(使徒 20:27)と述べていますが、これは「御国の福音」と呼ばれているものです。私は 2014 年からこの「御国の福音」に目が開かれ、その奥義を悟ろうとして尋ね求めています。悟るためには、持っている物すべてを売り払ってしまうような高価な真珠を見つけた商人のようにならなければなりません。そのためには神に立ち返り、神の視点から物事を考えなければなりません。そうでなければ世の流れに押し流されてしまうだけです。「心を新たにして、自分を変えていただく」ためには、「御国の福音」を余すところなく知ることが余儀なくされるのです。その意味において、「よろこびだ しかしかなしみでもある いらだちだ しかもやすらぎがある」という詩のことばと何かしら共鳴するのです。

●今年「信仰の継承を目的としたクリスチャンホームによるキャンプ」の三回目ですが、このキャンプに込められた意味をいよいよ確かなものにしていただけるよう、見分ける知恵をいただきたいと祈っています。そのことを踏まえつつ、今回は、ヨシュアが語った「**私と私の家族とは主に仕える**」という告白(ヨシュア記 24:15)とその告白に至る神の真実について、ご一緒に考えてみたいと思います。

【新改訳 2017】ヨシュア記 24 章 14～15 節

14 今、あなたがたは【主】を恐れ、誠実と真実をもって主に仕え、あなたがたの先祖たちが、あの大河の向こうやエジプトで仕えた神々を取り除き、【主】に仕えなさい。

15 【主】に仕えることが不満なら、あの大河の向こうにいた、あなたがたの先祖が仕えた神々でも、今あなたがたが住んでいる地のアモリ人の神々でも、あなたがたが仕えようと思うものを、今日選ぶがよい。ただし、

私と私の家は【主】に仕える。」

●この告白はきわめて個人的です。この箇所以外にもこれと似たような表現を見ることができます。

【新改訳 2017】創世記 7 章 1 節

【主】はノアに言われた。「**あなたとあなたの全家は**、箱舟に入りなさい。この世代の中であって、あなたがわたしの前に正しいことが分かったからである。

●ノアは自分の家族を神の命令に従わせる家長としてのリーダーシップを持っていました。ノアの時代に神を信じるということは、マイノリティ(少数派)の極みそのものでした。ノアは、後の世に対し、神を恐れる(神を信じる)親の信仰が自分自身のためだけでなく、子どもたちへの祝福のあかしとなる「型」とな

っています。後に父の権威(それは神への権威)に背くことになるハムでさえも、ノアの信仰によって洪水から救われました。これは神の目には家族が一単位として、つまり父親を頭(あるいは代表者)として、親と子が一つと見なされているからです。これはアブラハム、イサク、ヤコブと同様、今日の時代においても有効です。神はご自分の選んだ民を家族単位で扱うことを原則としておられます。それゆえ新約聖書の使徒 16 章 31 節にも、異邦人である看守に語ったパウロとシラスのことばに「**主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます**」とあります。この場合の「あなたの家族も」とは、「あなた」から始まる家族を意味します。あなたの両親やあなたの親戚ではありません。あくまでも「あなた」から始まる家族を意味するのです。なぜなら、あなたに与えられている神の権威は、あくまでも「あなた」によって作られる家族に対する特別なものだからです。ですから、ヨシュアの語った「私と私の家」、主がノアに語られた「あなたとあなたの全家」、そしてパウロとシラスが看守に対して語った「あなたもあなたの家族も」には、同様の意味があるのです。

1. 「主に仕える」とはどういうことか

●ヨシュア記 24 章 15 節の「私と私の家(家族)は主に仕える」とのヨシュアの告白は、ヨシュア記全体の結論です。ヨシュア記 24 章には、「仕える」というヘブル語動詞「アーヴァド」(עָבַד)が 25 回使われていますが、「主に仕える」という意味で使われているのは 14 回、主にではなく「他の神々に仕える」という意味で使われているのは 11 回です。まさに「主」か「他の神々」(偶像)か、そのうちのどちらかを選べと迫っているのです。この 24 章はヨシュアがイスラエルの全部族を「シェケム」という場所に集めて、これまでの歴史を回顧したあとで、どの神に仕えるかを選択するように決断を促した場面です。



(1) 「シェケム」(שֵׁכֶם)

●「シェケム」(שֵׁכֶם)は、アブラムがその妻と甥のロトを連れてカナンの地で最初に滞在した地でした。アブラムの場合、シェケムで主が現れて「わたしは、あなたの子孫にこの地を与える」と言われました。そこで、アブラムは顕現された主のために、そこに祭壇を築いたと記されています(創世記12:7)。ここは歴史的にきわめて重要な場所です。北はエバル山、南はゲリジム山、その谷間にあるのが「シェケム」(שֵׁכֶם)です。「シェケム」という言葉は「肩」や「尾根」「分水嶺」を意味することばです。申命記 1 章 29 節には、「あなたが行って行って所有しようとしている地に、あなたの神、【主】があなたを導き入れたら、あなたはゲリジム山の上には祝福を、エバル山の上にはのろいを置かなければならない。」とあるように、シェケムは**選択を迫られる場所**だということです。後にヨシュアはこのシェケムにおいて、神ご自身がアブラハムに対して約束されたことが実現したことを示すと同時に、全イスラエルに対して、主に仕えるか、他の神々(偶像)に仕えるかの選択を迫ったのです。ヨシュアが「私と私の家(家族)は主に仕える」ということばを残したのも、そこには厳然とした神の約束の成就があったからでした。

●また「シェケム」は、かつてヤコブが伯父ラバンの住むパダン・アラムからの帰途、天幕を張った場所でもあります。ヤコブはその土地の一部を百ケシタで買い取り、そこに祭壇を築いて「イスラエルの神である神」と名づけます(創世記33:18~20)。そこで一つの出来事が起こります。ヤコブの娘ディナがその土地の族長であるヒビ人ハモルの子シェケムによって辱められるという事件です。このことによって、ヤコブの家族とシェケムに住む人(異邦人)とが互いに姻戚関係を結ぶ羽目になろうとしていました。しかしヤコブの息子たちがこのことに心を痛め、ひどく怒りました。特にディナの兄シメオンとレビは、シェケムに住むすべての男性が割礼を受けることを条件に承諾するかに見せかけ、割礼を受けた者全員を三日目に剣で殺しました。さらには、その土地に住む幼子や妻たちをとりこにし、家畜や全財産、家にあるすべてのものを略奪したのです。シメオンとレビのしたことは残虐で、私たちには理解できないことかもしれません。しかし不思議にも神はこのことについて沈黙しておられるのです。ヤコブはこの事件の後にベテルに上ろうとしますが、「苦難の日に私に答え、私が歩んだ道でともにいてくださった神に、祭壇を築こう」と言って、家族が手にしていたすべての異国の神々(偶像)と、耳につけていた耳輪とを、シェケムの近くにある榎の木の下に埋めました。それからヤコブはすべての家族といっしょにベテルに上ったのです。これら「シェケム」における一連の出来事の中に、神のみこころにかなうものとそうでないものとを「**選び分ける**」ということが成されているのです。

●後に、イスラエル人がエジプトから携え上ったヨセフの骨は、このシェケムに葬られることとなります(ヨシュア記24:32)。このことは後で再び触れることとなりますが、アブラハム、イサク、ヤコブ、そしてヨセフへと受け継がれた神の約束が見事に成就しているのです。これは驚くべき神のご計画なのです。

●私たちにとっても、神に対する決断が現実の中で折れてしまわないように、それを厳しく呼び覚ましてくれるような「シェケム」が必要です。そんな霊的な場所に自ら身を置かなければなりません。「オール・キッズ・キャンプ」がまさにそのような場所であったらと願うところです。そのことがあって初めて次の段階である「ベテル」(神の家)に移動することができるのです。

(2) 「主に仕える」—「しもべ」「弟子」

【新改訳2017】ヨシュア記24章14~15節

14 今、あなたがたは【主】を恐れ、誠実と真実をもって主に仕え、あなたがたの先祖たちが、あの大河の向こうやエジプトで仕えた神々を取り除き、【主】に仕えなさい。

15 【主】に仕えることが不満なら、あの大河の向こうにいた、あなたがたの先祖が仕えた神々でも、今あなたがたが住んでいる地のアモリ人の神々でも、あなたがたが仕えようと思うものを、今日選ぶがよい。ただし、私と私の家は【主】に仕える。」

●これに対して、民たちの代表は**三度**「私たちは主に仕えます」(18、21、24節)と答えてシェケムで契約を更新しています。一度ならず、三度もというのは一見しつこいように思えます。しかし、聖書で「三度」というのは、主に対する確約を意味します。ペテロがイエシュアに対して「三度、否む」ことも、イエシュアが復活後にペテロに「三度、主を愛するかと尋ねた」ことも同じです。また、使徒の働きの中に、パウロの主との出会いが三度示されていることも同じなのです。

●ヨシュア記 24 章には、「仕える」という動詞「アーヴァド」(אָרַב)の名詞「エヴェド」(עֲבָד)が 2 回 (17 節、29 節)使われています。それは「奴隷」「しもべ」を意味します。だれかの奴隷になることは決して良い意味とは言えませんが、神との関係に用いられる場合には、最高の称号となります。「主のしもべモーセ」、「主のしもべヨシュア」、「イエシュアのしもべパウロ」というようにです。新約聖書の「しもべ」はギリシア語の「デューロス」(δούλος)ですが、意味的にはイエシュアが「**だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。**」(【新改訳 2017】マタイ 16:24)と言われる「弟子」のことです。この基準こそ「主のしもべ」と呼ばれるもので、そのような者に神は「天の御国の奥義」を知らせてくださるのです。この基準をもって主に仕えるべきことを、ヨシュアはイスラエルの全部族に対して命じています。私たちクリスチャンホームもこの「主のしもべ」「弟子」を目指さなくてはなりません。

2. ヨシュアの告白の根幹にある「^{たいまつ}松明の契約」

●ヨシュア記 24 章において回顧している主の約束(契約)は「**松明の契約**」と言われるものです。異邦人である私たちクリスチャンはこの契約について十分に悟ってはいないと思われます。この約束は文字通りイスラエル(ユダヤ人)に対するものであり、ヨシュアの時代に実現したものであり、かつ最終的な成就の「型」として、これからの約束でもあるからです。

●皆さんは、クリスチャンが主を信じることによって、「天の御国」が完成すると思っているのでしょうか。主の祈りのように御国が来ると思っているのでしょうか。それは違います。イスラエルに与えられた神の約束がこの地に実現しないと、御国は完成しないし、クリスチャンに約束されている「救い」も完成しないのです。「イスラエル」という鍵をしっかりとっていないと、聖書は正しく理解出来ないばかりか、神のご計画について肝心の部分を知らない者となってしまいます。驚くかもしれませんが、日本の教会においてこの知識がきわめて希薄なのです。つい最近、福音派が出版している「百万人の福音」の 4 月号に、「終末に関する特集」の記事が載りました。ところが、なんと「イスラエル」という文字が一つもなかったのです。イスラエルは御父の初穂であり、御父の心に触れるものです。しかしその言葉がひとつもなく終末のことが記されているのです。異邦人クリスチャンはイスラエルという根に接ぎ木されているにもかかわらず、そのことを悟れないでいるのです。例えば「神の賜物と召命とは変わることがありません。」(ローマ 11:29)とは本来イスラエルについて語られているのですが、このことばが独り歩きして使われていることがしばしばです。パウロによれば、これはイスラエルと教会に関する奥義だということです。その奥義とは、「イスラエル人の一部が頑なになったのは異邦人の満ちる時が来るまでであり、こうして、イスラエルはみな救われる」(ローマ 11:25~26)ということです。イスラエルについての神のご計画を知ることは聖書全体を知る鍵であり、それゆえそのことにひとたび目が開かれるならば、間違いなく聖書の読み方が変わるのです。これは「ヘブル的視点から聖書を読む」という言い方もなされています。長い間聖書に親んで来た人でも目からうろこが落ちる経験をするはずで、私のホームページ『牧師の書斎』はそのような視点から聖書を解説しているので、ぜひご覧になってみてください。

●ところで、ヨシュアの告白の根幹となっている「松明の契約」とはなんでしょうか。それは創世記 15 章 7 節以降に記されています。

【新改訳 2017】創世記 15 章 7～21 節

- 7 主は彼に言われた。「わたしは、この地をあなたの所有としてあなたに与えるために、カルデア人のウルからあなたを導き出した【主】である。」
- 8 アブラムは言った。「【神】、主よ。私がそれを所有することが、何によって分かるでしょうか。」
- 9 すると主は彼に言われた。「わたしのところに、三歳の雌牛と、三歳の雌やぎと、三歳の雄羊と、山鳩と、鳩のひなを持って来なさい。」
- 10 彼はそれらすべてを持って来て、真っ二つに切り裂き、その半分を互いに向かい合わせにした。ただし、鳥は切り裂かなかった。
- 11 猛禽がそれらの死体の上に降りて来た。アブラムはそれらを追い払った。
- 12 日が沈みかけたころ、深い眠りがアブラムを襲った。そして、見よ、大いなる暗闇の恐怖が彼を襲った。
- 13 主はアブラムに言われた。「あなたは、このことをよく知っておきなさい。あなたの子孫は、自分たちのものでない地で寄留者となり、**四百年の間**、奴隷となって苦しめられる。
- 14 しかし、彼らが奴隷として仕えるその国を、わたしはさばく。その後、彼らは多くの財産とともに、そこから来る。
- 15 あなた自身は、平安のうちに先祖のもとに行く。あなたは幸せな晩年を過ごして葬られる。
- 16 そして、**四代目の者たちがここに帰って来る**。それは、アモリ人の咎が、その時まで満ちることがないからである。」
- 17 日が沈んで暗くなったとき、見よ、煙の立つかまどと、燃えているたいまつが、切り裂かれた物の間を通り過ぎた。
- 18 その日、【主】はアブラムと契約を結んで言われた。「**あなたの子孫に、わたしはこの地を与える**。エジプトの川から、あの大河ユーフラテス川まで。
- 19 ケニ人、ケナズ人、カデモニ人、
- 20 ヒット人、ペリジ人、レファイム人、
- 21 アモリ人、カナン人、ギルガシ人、エブス人の地を。」

●これが「松明の契約」と言われるものです。神がアブラムと結んだ一方的な契約なのです。一方的というのは、そのときアブラムは深い眠りに落ちていたからです。当時は、契約を交わす双方が切り裂かれた動物の間を通るという方法がとられていました。しかし、「見よ、煙の立つかまどと、燃えているたいまつが、切り裂かれた物の間を通り過ぎた」とあります。「煙の立つかまどと、燃えているたいまつ」とは、神ご自身の臨在の象徴です。その神ご自身だけが契約を一方的に結ばれたのです。

ということは、アブラムに対して、神は主権的にその約束を果たされることを意味します。果たして、この約束は実現したのでしょうか。答えは、「はい」です。ただし、それは「型」として実現したのです。ヨシュアの時代にはまだ戦うべき地が残っていました。ダビデとソロモンの時代において神が与えようとする地はほぼ完全に与えられましたが、それもイスラエルが北王国と南王国の二つに分断したことによって、再び、土地は奪われていきました。神がアブラムに対して約束した土地が真の意味で賦与されるの

は「終わりの日」のことで、これからのことです。すなわち、「松明の契約」はキリストの地上再臨によって文字通り完全に実現されるのです。この信仰のスケールにおいて、ヨシュアの語った「私と私の家族とは主に仕える」という告白が預言的に語られているのです。

- 「松明の契約」における「**四百年の間**」という意味と「**四代目の者たちが帰って来る**」ということばは「型」だと言いましたが、この契約がどのようにして成就したかについて述べておこうと思います。

(1) 「四百年の間」の奴隷の生活からの解放

- 13 主はアブラムに言われた。「あなたは、このことをよく知っておきなさい。あなたの子孫は、自分たちのものでない地で寄留者となり、**四百年の間**、奴隷となって苦しめられる。」
- 14 しかし、彼らが奴隷として仕えるその国を、わたしはさばく。その後、彼らは多くの財産とともに、そこから来る。
- 15 あなた自身は、平安のうちに先祖のもとに行く。あなたは幸せな晩年を過ごして葬られる。

●ここで「あなたの子孫」と言われているのはだれのことでしょうか。それは「自分たちのものでない地で寄留者となり、**四百年の間**、奴隷となって苦しめられる」とあることから、「あなたの子孫」とは「イサク」ではなく、「ヤコブ」のことです。このことばは、イスラエルの民がエジプトで 400 年の間奴隷生活をすることによって成就されました。聖書で 40、400 という数字は「試練」を意味します。そして「彼らが奴隷として仕えるその国を、わたしはさばく。」ということも実現しています。神がイスラエルの叫びを聞き、エジプトを「さばく」ことによって、この預言も成就しています。また「その後、彼らは多くの財産とともに、そこから来る。」ということも成就しています。エジプト人はイスラエルの民が一刻も早く出ていくことを願い、イスラエルの民が要求したとおりに、多くの財産を与えて送り出したのです。このことを歌っている詩篇 105 篇 37 節には「主は銀と金を持たせて御民を導き出された。主の諸部族の中でよろける者は一人もなかった。」と記しています。「よろける者」(新共同訳「落伍する者」、口語訳「倒れる者」)は一人もなかったというのは、エジプトが十の災いを受けたにもかかわらず、イスラエルの中には不思議にもその影響を受けた者がいなかったということです。イスラエルの民が得た「多くの財産」は、神がイスラエルのために貯えていた賃金として与えてくださったものでした。これによってイスラエルの民は「多くの財産とともに、そこから来る。」ということが成就したのです。

(2) 「四代目の者たちが帰って来る」とは

●「松明の契約」において、「四代目の者たちが帰って来る」とはどういうことでしょうか。実は、このことばの理解がきわめて重要なのです。ここで約束された「四代目」に当たる人物とはヨシュアではありません。**ヨセフ**のことです。アブラハム－イサク－ヤコブを経て四代目に当たるヨセフによって成就されたのです。しかしすでにヨセフはエジプトで死んでいるのに、四代目としてカナンに帰ってくるというのはいったいどういうことなのでしょう。ヨセフの遺言を見てみましょう。

【新改訳 2017】創世記 50 章 24～25 節

24 ヨセフは兄弟たちに言った。「私は間もなく死にます。しかし、神は必ずあなたがたを顧みて、あなたがたをこの地から、アブラハム、イサク、ヤコブに誓われた地へ上らせてくださいます。」

25 ヨセフはイスラエルの子らに誓わせて、「神は必ずあなたがたを顧みてくださいます。そのとき、あなたがたは私の遺骸をここから携え上ってください」と言った。(遺骸=ミイラ)

●ヨセフの父ヤコブはエジプトの地で 17 年間生きましたが、死ぬ間際に 12 人の息子の中から「その子ヨセフ」を呼び寄せました。ヤコブはヨセフの手を自分のももの下に入れて、自分が眠りについたなら、エジプトから運び出して、先祖たちの墓に葬ってくれと遺言しました。そしてヤコブはアブラハム、イサクとともに「マクベラのほら穴」に葬られました。ヨセフはこのような父ヤコブの遺言を決して忘れることなく、自分の死を間近に控えたときにも、カナン¹の地に対する希望にあふれていたのです。そして創世記 50 章 25 節で、ヨセフはイスラエルの子らに誓わせて、「神は必ずあなたがたを顧みてくださいます。そのとき、あなたがたは私の遺骸を携え上ってください」と言いました。なぜヨセフは自分の「遺骸」をここから携え上って下さいと言ったのでしょうか。「私の遺骸」と訳されていますが、ヘブル語原文では「私の骨々」となっています。「骨」はヘブル語で「エツェム」(עֲצָמוֹת)です。それは単に「骨」という意味の他に、信仰的な物事の「本質」を指し示すことばです。つまりその本質とは、アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフは肉によれば死んだ者ですが、信仰によれば「生きた者」である、ということです。彼らの信仰は常に生きているのです。これが「骨」(「エツェム」 עֲצָמוֹת)が意味している信仰の「本質」なのです。

【新改訳 2017】ヨシュア記 24 章 32 節

イスラエルの子らがエジプトから携え上ったヨセフの遺骸は、**シエケム²の地**、すなわち、ヤコブが百ヶシタでシエケムの父ハモルの子たちから買い取った野の一面に葬った。

●ヨセフの骨は荒野の 40 年とカナン征服の約 16 年の期間を経て、シエケムの地に葬られました。その土地はヤコブによってすでに買い取られてはいたのですが、この埋葬こそ、「松明の契約」への確固たる不動の信仰をあかす象徴として、後々のイスラエルの民にとって信仰のしるしとなったはずです。それゆえヨセフの骨と一緒にあるということは、当然日々の信仰生活の歩みの中で、常に神の約束の成就の日を待ち望む大きな力となったことでしょう。この信仰こそが、ヨシュアをして「**私と私の家族とは主に仕える**」と告白させたと言えるのです。これは実に驚くべき永遠につながる神のご計画とみこころに基づく信仰告白なのです。

ベアハリート(おわりに)

●ヨシュアの「私と私の家族とは主に仕える」という信仰告白は、アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフに連綿と続く「松明の契約」に対する信仰のあかしに基づいています。こうした神のご計画に対する関心は、クリスチャンホームの信仰継承のために必要不可欠です。神が選んだ一つの家族(イスラエル)に対す

るご計画は今もなお息づいています。異邦人である私たちクリスチャンホームも、神の約束の真実に対する恐れをさらに新たにすることで、ますます「私と私の家族とは主に仕える」という告白をもって、次世代に信仰を継承していくことができるのではないのでしょうか。

●再度、言います。クリスチャンホームの信仰継承の取り組みは、主にある**大事業なのだ**ということです。そのためには、クリスチャンホームの親子ともども聖書を深く学んで神のご計画の全体像を知りつつ、神の御声に聞き従う責任と使命に目が開かれるようにと祈ります。「オール・キッズ・キャンプ」がその励ましのキャンプとなればと願っています。この働きのために連盟の先生方も献身的に仕えていくつもりです。また来年も、北海道でお会いしましょう。

2018.4.29

日本神の教会連盟「国内宣教委員会」委員長 銘形 秀則